

# 日本人の神概念の変遷

——仏教伝来以前の原風景として——

## 畑 毅

### 1. 序

本論文は、仏教と共に日本民族の宗教意識と精神文化の中核を成す神概念の構造と形成過程とを、仏教伝来以前に絞って考察してみようとするものである。そのためには、まず日本民族の種族としての形成史を十分に踏まえておく必要がある。

明治以後、日本人論はその科学的研究手法（主に形質人類学）の発展に随って多様な展開を見せてきたが、近年はDNAの解析など分子生物学的手法も多角的に用いられ、日本民族の種族としての形成史が大まかながら、われわれにも分かる段階へ漸く到達しつつあると行うことができると思う<sup>1)</sup>。

ところで、精神文化というものは基本的に無形なものである。人から人へ、共同体から共同体へ、民族から民族へと引き継がれる無形の文化形態であり、文字として記される以前の精神文化というものは容易に知り難い。文字文化の逸早い発展を見せた中国の文献は貴重な資料であると言えども、中華文明より見た見解である<sup>2)</sup>ために、その周辺の異民族の全貌を窺い知るとは不可能であると言える。まして、習俗として外に現われない無形の精神文化ともなれば、なおさらであろう。

近代にフィールドワークという、調査の対象となる部族や民族の中に研究者自らが入り込み生活を共にしつつ、習俗や文化を観察しようとする方法によって、アニミズムやシャーマニズムという原始的の信仰形態が明らかにされ、学術的に定着をみた。

しかし、これから私が論じようとするのは、精神文化並びに宗教意識の構造と形成史なのであって、ある意味では過去の消え去った遺産なのである。本論文は、そのおそらくは至難の業を、最新の民族形成史の研究の成果や限られた文献資料などを用いて複眼的視点から考察しようとするものである。問題は多岐にわたり、多様な学問領域からの綿密なアプローチが必要なため、今は概説という形式を取らざるを得ない。

種族や民族が異なれば、言語も異なり、その精神世界も異なると考えるのが当然であろう。したがって、まずは日本民族の種族的形成史を見ておかなければならない。

日本人論、或いは日本文化論を論じる場合、まず根本的命題として押さえておかなければならないことは、われわれが一般に言うところの日本人とは、現代においてはかなりの均質性を有するものの、その形成過程を見れば明らかに混血種族であるという至極当然な事実である。この根本命題が同一言語を話す単一民族という固定観念の下でなかなか理解されずに、時として忘れられがちなのである。

いわゆる日本人の種族としての構成要素は、種々の細かな議論はあるとしても、大きく二つに分類される。一つは、紀元前1万3千年頃に始まる縄文文化を担った人々である。(以下、縄文人と言う。)もう一つは、紀元前10~5世紀頃<sup>3)</sup>から大陸から水稲農耕をもたらした弥生文化を担った人々と、さらに古墳時代、朝鮮半島の新羅による統一期までに、主に扶余、高句麗、百濟、伽耶諸国、新羅などの中国東北地区から朝鮮半島にかけての地域からやって来た人々である。大陸渡来の両者(弥生時代人と古墳時代人)は列島に渡来した時代が異なるというだけで、共に寒冷適応した北方系モンゴロイドであるから、大まかながら一括してこれを渡来人と言ってよいであろう。すなわち、異なる二つの種族の分類とは、縄文人と渡来人ということである。

数年前までは日本人の構成要素は、寒冷適応をしていない南方起源の古モンゴロイド(縄文人)と大陸北方で寒冷適応を遂げた北方系の新モンゴロイド(渡来人)の二つであり、それが混血したのが現代日本人であるとする埒

原和郎の、いわゆる二重構造論が有力な学説であった<sup>4)</sup>。しかし、近年のDNA解析などによって、従来南方系とされた縄文人の主流は、遺伝子の上から典型的な北方系モンゴロイドであることが明らかになった<sup>5)</sup>。つまり、彼らの源郷はシベリアなど大陸北方に想定されるべきである<sup>6)</sup>。縄文文化圏にあった沖縄本島を含む琉球諸島域の住民までを北方起源と見做すことができるのである。

こうした、最新の自然人類学における成果としての日本民族の種族構成論を踏まえた上で、その精神世界を考察してゆきたい。縄文時代、弥生時代、古墳時代と重層的な種族構成の上に、神概念も相応に変質を見せてきたのである。その様相を時代系列に沿って考察してゆく。

## 2. 神々の原像

われわれはまず、日本独自の最初の文化圏を形成した縄文時代の考察から始めなければならない。縄文時代が続いたおよそ1万年という時間は独自の文化を形成するに十分であり、その文化圏は不思議なことに、北は千島列島から南は琉球諸島までに及び、ほぼ現代の日本国の領土と重なるのである。

縄文時代の文化や習俗については、主に遺跡から出土する遺物などから想像され、またある程度復元され得るのであるが、その精神文化については、呪術的な意匠の土器や土偶、装身具、抜歯の痕跡などから僅かに知られるのみである。そこで、参考となるのが、形質人類学や遺伝学の立場からも縄文人の直系に近い子孫と見做されるアイヌや沖縄の人々の精神世界である。両者の自然観や神観念には親近的な共通性も見出される一方で、相当な相違点も見られるから、一緒くたに論じることには抵抗のある向きもあろう。その点にも留意しつつ、まずはアイヌのそれについて考察を加える。

アイヌ民族は現在、北海道や東京を中心に約2万6千人ほどが存在するとされるが、相当程度混血が進行しており、2006年の北海道における調査も自己申告であるため、その実態は必ずしも詳らかではない<sup>7)</sup>。現在、完全なアイヌ語を話せる老人は数人に過ぎないと言われる。しかし、近世まで本土

の日本人(和人)とは明らかに異なる生活習慣や風習を持ち、独自の民族文化を形成していたことは疑いようのない事実である。明治以降、同化政策が推し進められたとは言え、アイヌ民族の文化はかなりの程度保存されてきたと言える。

では、アイヌ民族の自然観、世界観、宗教観とはどのようなものであったのだろうか。明治時代のイギリス人宣教師でアイヌ文化の研究者でもあったジョン・バチェラー(John Batchelor)は、アイヌの人々が非常に敬虔な精神の持ち主であることを述べている。そもそも、「アイヌ」という呼称は、自然界のあらゆるものに宿る神(カムイ:kamuy)に対する人間の意味である。したがって、「アイヌ」の相対的概念として常に「神」が存在しているのである。アイヌにとって神は、決して人間を超越的に離れたものではなく、ごく身近な存在として万象に宿る神霊的なものと捉えられているのである。火の神もいれば、水の神もいる。丹頂鶴も神(湿原の神)であり、フクロウも神であり、熊も神である。そうした点からアイヌの自然観、世界観にはアニミズムの要素が強いと言える。アイヌは日常生活においても、その意識として精霊たちと共に生きているのである。広義の汎神論的自然観とも言えよう。

森羅万象に神を見るアイヌは、精神的に敬虔で信心深い民族と言うことができるであろう。しかし、その神概念は神が身近な存在であるだけに、思想的に形而上化されたり、構造的に秩序付けられたりという思索性、抽象性には乏しいと言うこともできる。このようなアイヌの神概念を原始的であるとか、非科学的であると批判する向きもあり得ようが、森羅万象に神を見出し敬虔な祈りを捧げるアイヌの精神性を、果たして聖なる神との接点が稀薄となった現代人が安易に批判できるものなのか、われわれはもう一度真摯に反省しなければならないであろう。そして、身近なあらゆるものに神を見出す精神性は、八百万の神と言われるように、現代の日本人の精神性の中にも深く継承されていることを確認しておきたいのである。

アイヌの精神世界を考察することで、縄文時代人のそれをある程度類推す

ることは可能であるかもしれない。最近の研究では、縄文文化は歴史的に見ても、世界の狩猟・採集民の文化として非常に高度に発達したものであったという指摘がなされている<sup>8)</sup>。おそらく縄文人の精神文化は、未開性を含みつつも高度で豊穡なものであったと私は推測するのである。そして、その宗教意識は多分にアニミズム的、汎霊的であり、身の周りの自然界を含め万象に対して非常に敬虔なものであったと想定される。

一方、琉球諸島に残存する沖縄の文化はどうであろうか。言語学的には、琉球語はアイヌ語に比較して、より日本語に近く、日本語との明らかな語彙の対応と、音韻変化の規則的対応が認められるため、日本語の一方言と見做されている。

琉球諸島域の狩猟・採集文化時代（貝塚時代）の具体的な様相は、その後稲作文化に移行したために詳細が知られない。沖縄本島では12世紀頃に稲作が入り農耕社会に移行した後は、按司と呼ばれる首長が出現し、そのおなり神としての祝女、すなわちノロが存在した。ノロは祭祀を司る神女の集団である。また、個人的な祈禱を行う民間の呪術師をユタと言うが、そのほとんどが女性である。ユタの行う祈禱とは、個人的な悩みなどに対して、神霊と交信し祖先の霊や神の意思を伝えるというものである。

そのあり方は、脱魂状態となり神霊や祖霊の声を聴くという点でシャーマニズムと言うことができるが、シャーマニズムが古代には中国大陆においても普遍的、広域的に存在した事実からも、第3節で述べる北東アジアに典型的なシャーマニズムの影響をどの程度蒙っているかは俄かに断定できない。また、その信仰形態には御嶽（うたき）信仰に見られるように、日本の古神道を彷彿とさせるものがあり、現代にも受け継がれている。私が個人的に知る巫女（民間の女性シャーマン）のユタとなる決定的な宗教体験は、自らの体内に龍が入るというものであった。また、そのユタが現在、神として拝み崇めているのは、白髭の老人の姿の神である。（そこに、私はC・G・ユングが人間の元型として唱えた「老賢者（マナ人格）」を連想した。）

琉球諸島域においては、宗教儀礼である祭祀を司る霊能者の役割の多くを

女性が担った点が特徴である。その理由としては、おそらく女性が男性に比べてトランス状態に入りやすく、靈感に優れるとされたという点を指摘できよう。それに対して、後述する大陸北東アジアのシャーマンには、かなりの高い比率で男性が存在することを指摘しておく。

沖縄においては、現在も霊的能力を有するとされる巫女に対する民衆からの信頼が篤く、この地域の一つの文化的特徴とすることができる。(しかし、実は韓国でも現代においても、巫堂=ムダンに対する民衆の根強い信仰が見られ、われわれはそこに、弥生時代以降の民間信仰の残存を見て取ることもできるかもしれない。私は朝鮮の民間信仰の根底をなすものは、現代に至るまで一貫してシャーマニズムであると確信している。)

ここで、沖縄・琉球諸島の巫女信仰の存在に触れたわれわれは、類似の存在として、本州最北端の青森県に現在も残る「イタコ」と「ゴミソ」についても言及しなければならない<sup>9)</sup>。

イタコは、本州最北端青森県下北半島の霊場である恐山において、死霊の口寄せをする盲目の女性霊能者として、既に広く一般に周知されている。古代の日本人には、人間が死ぬと、その靈魂は山などの自然に帰ると素朴に考えられていたようである。イタコはそうした死者の靈魂を自らの身に憑依させ、死者霊の言葉を口寄せするのである。盲目の者が多い理由として、視覚に障害を持つ者がそれを補うべく第六感、すなわち通常感覚と意識レベルを超えた特異な霊的能力を開示させることは、十分にあり得ることと言わなければならない。

現在、彼女らは半ば職業化しているから、その霊媒としての能力に疑問を呈する人も多いが、ここではそのような文化が現代に伝承され、存在しているという事実を知ることの方が重要である。

同じく青森県津軽地方には、ゴミソと言われる霊能者が存在する。彼らは盲目でもなく、その中には男性も存在する。イタコと対比してゴミソの特徴を述べれば、彼らは霊の受動的な媒介者であると言うよりも、靈感の体現者であると言うことができる。彼らは、受動的な霊媒ではなく、自らの苦難の

体験を原因として、伝承されている方法論による修行によって、靈的能力を獲得するのである。彼らが身に降ろすものは、イタコのような死者の靈魂ではなく、天照大神、観音、稲荷、山の神などの、日本の歴史を通じて信仰され、日本人の意識に沈潜している神格としての靈威であることが多い。

繰り返すが、ここでわれわれが問題とすべきは、イタコやゴミソの靈能力の真贋ではない。大切なのは、かつて日本列島の中央部においても存在した宗教的精神文化が、現在も沖縄や青森県という日本の周辺部に残っているということを知る視点である。(日本の文献から受ける私の印象では、室町時代ぐらまでは京の都の周辺にも、イタコに類似するような民間的な巫女が頻繁に存在していたように思われる。)

以上、アイヌ文化、沖縄・琉球諸島の文化、そして現代に残る青森県のイタコ・ゴミソといった特異な文化を概観したが、いずれもが日本に古層として存在し、また或いは現代人にまで通底する精神文化であることを確認しておきたい。特に沖縄・琉球諸島の巫女文化、青森県のイタコ・ゴミソといった靈的触媒としての文化は、おそらくは弥生時代以降に大陸からもたらされたシャーマニズムの残存と考えられる。何故ならば、こうした靈的媒介者が社会的に高位な者として認知され、また民衆から尊敬され、時には社会的な先導者にもなるという現象を、縄文時代以来の狩猟・採集文化を継承すると考えられるアイヌ社会の中では、明確な形で確認できないからである。(アイヌにもトウスクル (tusukur) というシャーマンが存在するが、アイヌ文化の成立を考えた時、オホーツク文化など北方からの影響を蒙っており、縄文文化のシャーマニズムの卓越性をはっきりとは跡付けできない。) 次節では北東アジアに典型的なシャーマニズムとその日本への影響を論じる。

### 3. 北方系シャーマニズムの浸透

現代日本人が総体として、70%から80%の割合で弥生時代以降に大陸から主として朝鮮半島を経由してやって来た渡来人の遺伝子を所有するということは、日本人が自らのアイデンティティを確認する上でも、改めて再認識

しなければならない事実である。

弥生時代以降、大きな規模の渡来の波が幾度かあったことが指摘されている<sup>10)</sup>が、要するに、大陸で戦乱や飢餓などの混乱があれば人々は朝鮮半島を南下する。したがって、半島での混乱を逃れるべく半島南部から押し出されるような形で人々が日本列島へ陸続と渡来してきたことは容易に想像が付く。半島では歴史を通じて恒常的に北から南へと人の移動の圧力がかかってきたのである。

そうした、人々の移動を考えれば、朝鮮半島南部と日本の九州北部が同じ文化圏であった時代も存在したかもしれない。国家の形成に当たっても朝鮮半島と日本とは明らかに連動していると思われる。最終的に朝鮮半島と日本とが明確に分離したのは、新羅と唐の連合軍が高句麗と百済を滅ぼし半島に統一をもたらした時点である<sup>11)</sup>。この時、日本に高句麗や百済から王族を含め大量の移民があったことは、『続日本紀』などからも窺うことができる<sup>12)</sup>。つまり、弥生時代の始まりからこの間、およそ1千年以上に亘って断続的に朝鮮半島から日本への人々の渡来があったのである。

水稻農耕が多くての人口を養うことができる農業形態であることは、つとに知られる。渡来人の数を明確に把握することは困難であるが、稲作技術を持った彼ら渡来人が温暖で水の豊富な日本列島において、急速にその人口を増したことは想像に難くない。現代日本人が七割から八割の割合で渡来人の遺伝子を保有するという現実を受け入れるのは、理性的にさほど困難なことではあるまい。

では、具体的に大陸からの渡来人とはどのような人々であったのだろうか。稲作文化の起源の地から、彼らの出自を江南地方の非漢族（いわゆる呉越系の種族）と見做す見解もあるが、やはり主体は朝鮮半島南部の、おそらくはアルタイ系の言語を話す人々（韓人・倭人）であったと考えられる。半島からの渡来は、まだ国家も民族もない時代から始まっているのであるから、要するに、大陸北方起源のアルタイ系、或いはツングース系の人々としか表現の仕様がなないのである。



私は高句麗と百済が自らその出自を扶余としている<sup>13)</sup>ことから、中国東北地区（——個人的には地理的呼称として満州、或いはマンチュウリアという名称を用いたい——）から朝鮮半島にかけて居住していたあらゆる種族が日本に渡来したのではないかと考えるのである。中国の史書に登場する種族名で言えば、濊貊、扶余、沃沮、肅慎、靺鞨、挹婁、韓などである。騎馬民族文化の流入を考えると、扶余や高句麗と隣接した匈奴、鮮卑などの影響も考えなければならないが、彼らが日本に渡来したと明言するだけの確証を私はまだ持たない。そこには文化的な伝播を認め得るのみである。（但し、匈奴や鮮卑は、種族的にはマンチュウリアの諸種族と近縁であったろう。）

ともかく、弥生時代以降の渡来人とは、中国東北地区や朝鮮半島を出自とするアルタイ系、或いはツングース系の人々であったとするのが、現時点での妥当な見解であろう。（もちろん、稲作農耕の伝播や、朝鮮に中国の植民地的な出先機関（漢四郡：楽浪郡・真番郡・臨屯郡・玄菟郡）が置かれていたことから、少数の江南起源の人々や秦・漢時代の漢民族の半島経由の渡来を否定するものではない。）

弥生文化や古墳文化が大陸から移植されたという表現は適切ではない。それらの文化を持った人々が渡来したと見做すべきである。然らば、彼らの持っていた自然観、宗教観、神概念とはどのようなものであったのであろうか。私はその精神文化、或いは信仰形態の主流をなしたものとして、第一にシャーマニズムを挙げたいのである。

ミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade) が提唱したようなシャーマニズムの定義や分類を、ここで改めて検証し詳述することは差し控えたい<sup>14)</sup>が、日本人、殊に大陸渡来系日本人の故地と考えられる中国東北地区やシベリアが、歴史的にシャーマニズムの卓越する地域であったことは言を俟たない。

ここでは、私はシャーマニズムの一般的解釈に加えて、とりわけ北東アジアに特徴的な幾つかの点を考察してみたい。まず、シャーマニズムが独特な展開を遂げた北東アジアの自然環境に目を向けたい。この地は世界で最も自然環境の厳しい寒冷地帯であり、人間も小進化として寒冷適応という身体的

特徴を獲得しなければならなかったほどである。シベリアや中国東北地区にも温暖な時代があった。しかし、その地の居住者は幾度かの寒冷期を生き延びるために、身体的特徴をも変化させねばならなかったのである。この地のシャーマニズムの特徴は、気象条件が人知、人力の到底及ばないほどに厳しかったことと密接な関係があると考えられる。

ある種の宗教者は、苦難を克服し精神の安寧を求めるため、或いは生の実存に根差すような根本的問題（宗教的・哲学的懷疑）を解決せんとするために自らに進んで苦行を課す。これは気候の温暖、寒冷を問わず、世界中の至るところで認められる現象である。苦行とは、人間の生存環境を限界状況にまで追い詰め、通常意識を変質させるものであり、その行為を通じて脳に新たな経路が形成され、新たな生の地平が顕現するのであろう。まさに擬死再生なのである。

こうした世界中に普遍的に認められる修行に対して、極端に寒冷な地域では生きていること自体が身体適応をも必要とするような、生存をかけた一種の行であるという側面を持つのではないだろうか。つまり、自然環境それ自体が人間に変性意識状態（altered state of consciousness）を生じさせ、また宗教体験をもたらしやすいという面があるのではないかと推測されるのである。宗教体験の前には、極度な心理的緊張状態を現じることがしばしばであるが、人間が生理的な存在である限り、そうした心理状態と自然環境が無縁とは言えないであろう。

シャーマンの神憑りや霊界巡りを精神病理と見做す見方は、以前より繰り返し指摘されてきたことである。癲癇気質やヒステリー気質の者が憑依体質や霊媒体質を所有しやすいことは私も認めるものであるが、北東アジアのシャーマニズムにはある種の堅固な体系と、機能としてのシステムがあって、社会に文化として浸透定着しており、決して一時的、或いは恒常的な精神病者を優れた霊能者として敬うというようなものではない<sup>15)</sup>。

さらに北東アジアのシャーマニズムの特徴として指摘したい点は、彼らの世界観に、明らかな垂直的思考構造が顕著に認められることである。それ

は、すなわち「天」の思想である。言い換えれば、天を最高神として戴き、時には自らを天の子孫であるとする「天神思想」である。この神は宇宙の原理を支配する主宰者と見做される。天神は宇宙や運命といった抽象的観念の主宰者とされるが、同時に多分に非人格的であると言える。モンゴル族や満州族（遼れば靺鞨、女真）などが盛んに天を祭ったことが文献からも知られる<sup>16)</sup>が、彼らは特定的人格神を祭っているわけではなく、宇宙の原理を支配し、人間界に対して宿命を下す最高神としての天神を祭っているのである。

私は、この天の思想こそが北東アジアが持った最も高度な抽象的思考として、積極的に評価したい。アイヌの思想を論じた箇所でも触れた万象に宿る身近な精霊的な神々は、ここでは天上にあって宇宙や人間界の運命を司る最高神として、抽象化され純化され昇華されている。そして、この最高神である天神と霊的交流を持ち得る者こそが特殊な霊力を持つシャーマンなのである。

したがって、北東アジアでは、こうした特異な能力を所有するシャーマンが共同体の指導者であり、最高の権威者であった時代が長く続いたであろうことが推測される。この地域では、中国の影響を受け、古代的な国家、つまり武力的な王権が形成され始めた時期においても、シャーマンは政治的な中枢にあって、祭祀者、預言者として甚大な権威と影響力を維持したのである。

日本でよく知られる『魏志倭人伝』<sup>17)</sup>において、邪馬台国は卑弥呼を女王とし鬼道によって統治すると記されている<sup>18)</sup>が、卑弥呼とは天神の意を聴く女性シャーマンであったのだろう。私には北東アジア起源のこの天の思想は、人々の渡来と共にそのまま日本に流入し、大した違和感や抵抗感なく浸透していったと思われる。天神の思想は抽象化、すなわちある程度普遍化された観念であり、また天は空間的には垂直な上方で、場所に限定されない概念であるからである。古墳時代の被葬者である権力者は何故に権力者たり得たか。私はその原因が必ずしも武力のみにあったとは考えない。彼らは天を祀り祭祀をよくする司祭者でもあった。彼らは、武力による政治的権力のみならず、天の意を知る者として、或いは天神の子孫として、宗教的にも人心

と地域社会を支配していたのだと考えるのである。彼らは神権の保持者であったと言えよう。当時の政体が、いわゆる「祭政一致」であったことは、研究者間の常識とするところである。その場合の「祭」とは、北東アジアのシャーマニズムに由来し、天神思想を核とする祭祀であったに相違ない。

記紀神話<sup>19)</sup>からも天皇家が、いわゆる天孫族なる大陸からの渡来部族、或いは豪族であったことは疑いを入れない。私はその本来の出自としての故地を、中国東北地区であると想定する<sup>20)</sup>が、それを主張することは学界のみならず社会的にも微妙な問題を包含するため、これ以上は触れない。

天皇家の祖神とされるのは天照大神（アマテラスオオミカミ）で伊勢神宮に祀られている<sup>21)</sup>。尤も、始原より天照大神が天皇家の祖神であったかどうかは大いに疑問があるところであり、岡正雄らが指摘するように本来の祖神は、男神のタカミスビ（——「記」では高御産巢日、「紀」では高皇産靈と記され、神の依り代＝神籬としての高木神が抽象化され、創生の神とされる——）であったろうとする見解に私は賛同する<sup>22)</sup>。（高木に天神が宿るとする信仰形態を、私はエヴェンキ族や韓国の現地調査で確認している。また、大和の古代豪族、葛城氏の祖神は高木神である高皇産靈神である。）両者はいずれも太陽に象徴される日の神であるが、アマテラスが母権的、村落共同体的、農耕神的であるのに対し、タカミスビは父権的、氏族的、軍事的、英雄崇拜的である。タカミスビが瑞穂の国である日本において、その最高神としての役割をアマテラスに変質させた。この辺りの消息にも、北東アジアに典型的なシャーマニズムの形跡と、その日本への浸透の過程を見て取ることが可能かもしれない。

私は弥生時代以降の移民を一括して渡来人と言ったが、それは人類学的観点から述べたもので、実際には1千年以上に亘る渡来には明らかに重層性が認められるのである。弥生時代の後の時代が古墳時代と分類されるように、農耕民的弥生文化に対して、明らかに異質な軍事的、氏族的、搾取的な古墳文化が重なっているのである。天孫族などの天津神系の氏族は後者に属する。そして、その出自が中国東北地区の、おそらくは扶余族等に求められるであろうことを私は推測した。その天津神系の氏族が日本を統一し、統治し

てゆく過程で、稲作文化の国である日本に適応する形で、本来、日神であり、農耕神であったアマテラス信仰を、天皇家が氏祖神格として吸収し同化し統合していったのであろうと思われるのである<sup>23)</sup>。

続いて、文献的な例証として、『日本書紀』に記される天皇家におけるシャーマニズムの痕跡を散見してみよう。

『日本書紀』垂仁天皇の条に、ヤマトヒメの話が記されている<sup>24)</sup>。ヒメはアマテラスの神霊を身に付けて各地を遍歴し、最終的に伊勢に鎮座したとされる。事実、現在も近畿地方を中心に元伊勢と言われる神社が幾つか存在する<sup>25)</sup>。彼女の逸話にわれわれは、神霊の媒介者としての女性シャーマンの役割を見て取ることができよう。

また、『日本書紀』神功皇后の条に、夫である仲哀天皇が崩じた後、皇后が穢れを祓って斎宮（イワイノミヤ）に籠もり神の託宣を聴く話が記されている<sup>26)</sup>。ここでは、神の託宣を聴く霊媒の役を神功皇后自身が務め、彼女をトランス状態に導くために琴を弾じる役を武内宿彌が務め、託宣が正しいか見定める審神者（サニワ）の役を朝廷祭祀を司る中臣氏が担ったとされる。ここからは、皇后さえもシャーマン、つまり神霊憑依の媒介者になっていたという事実を見ることができ、如何にシャーマニズムが日本に浸透していたかが窺われる。また、その際にきちんと役割分担が成され、神の託宣を聴くためのシステムが確立していたことが知られる。シャーマニズムは一部の土着の習俗などではなく、政治権力の中枢部にまで浸透していた、確固とした体系を持つ宗教的文化形態であったとすることができるのである。

以上、北東アジアに起源すると考えられる信仰形態であるシャーマニズムが、弥生時代以降、如何に深く日本人に浸透していたかを見たのであるが、仏教伝来以前の日本は、まさに自然崇拜的、汎神論的要素を保ちながらも、当時の北東アジアと相通じる類のシャーマニズムが、政権の中枢部にまで浸透していたことを確認できる。当時の日本は、北東アジアに典型的なシャーマニズムの卓越していた地域であったと言い得るであろう。（そのことは、大陸東北部の扶余などの国々や朝鮮半島の国々にも共通していたであろう。）

#### 4. 神道の国・日本の形成

日本人の宗教意識の中核に、仏教と共に神道が存在することは、明治時代以降の国家神道を見るまでもなく、現代のわれわれにおいても、日常の自らの意識を真摯に、また理性的に観じるだけの精神を持つ者ならば容易に実感されることである。現に日本の地域社会では、現在でもその共同体的な纏まりを示す宗教儀式として、年配者を役員とし、寺院の行事と併存して、神社の神事も執り行われている。

家の神棚でも、神社でも、或いは御神体とされる山や岩などの自然物に対してでも、われわれはそこに靈的な何ものかを感知することができる。このことは、前節で述べたところの、北東アジアに起源するタイプの、シャーマニズムを中核としてそれに付随する自然観や世界観が、日本列島において、それ以前のアニミズム的、汎神論的世界観や弥生時代の稲作農耕民的な自然観と融合し、しっかりと土着化したことを意味するものであると考えられる。

ここに、日本独自の信仰形態としての神道の出発点を見出すことは可能であろう。つまり、おそらくは扶余系の種族（天孫族に代表される天津神系種族）が持ち込んだ最高神として天を戴く天神信仰が、日本土着の縄文的世界観や弥生時代人の農耕民的世界観と融合混淆し、より多彩で豊穡な神概念を再形成した。日本民族の形成史とは日本人の世界観、宗教観の形成史に他ならない。異種族の融合には、必然的に異なる世界観、宗教観の融合が伴うものなのである。

日本において、最初の独自の文化を築いた縄文人の起源が、DNAレベルの解析の結果、おそらくはシベリアなど北方アジアに求められることは既に述べた。したがって、弥生時代以後の渡来人の自然観や世界観と縄文人のそれとの融合混淆に、それほど断絶と摩擦があったと私は考えない。共に北東アジアで数万年に及ぶ歴史を共有しているという点で、そこにはアニミズム的要素や汎神論的要素などの共通点も多いはずなのである。例えば、山岳信仰は北東アジアにおいても広く見られる現象であり、日本の白山信仰<sup>27)</sup>は

明らかに白頭山（長白山）信仰，太白山信仰などの大陸の山岳信仰の影響，或いは伝播であろうと思われる。

そこで，この節では両者の接触と混淆による神概念の変質の具体相と日本独自の神道の形成に焦点を当てて考察を加えてみたい。

縄文人の神概念は，おそらくはアイヌに見られるような，神を万物に宿り世界に遍満する精霊として身近に感じるものであったろうし，弥生時代の人々の神概念もシャーマニズムの影響が見られるとは言え，それは憑依による祖霊や雑霊との交信という土着文化としての習俗的な要素が強く，神は太陽神に代表されるように，自然の恵みをもたらす農耕神としての意味合いが強かったように思われる。そこに新たに導入されたのが，前節で述べた，マンチュウリアなどの北東アジアに起源し，天を絶対的な最高神として垂直思考の構造を顕著に有する，天孫族らのもたらした天津神系の神概念であった。

もし，今便宜的に，縄文系，弥生系，天孫系と三分した場合，天孫系のいわゆる天神思想，つまり天神を超越的絶対者とする垂直的思考の導入によって，神々の世界は新たな多層的・多層的な構造秩序を持つものとして再編成を迫られたと言ってもよい。最高神のいます天上の神々（——祖先神の意味合いも含む——）の世界が，記紀神話においては高天原である。ここに日本民族は，天上に高天原（天上界，祖先神の霊界）を戴き，地上には葦原中津国および海のワタツミの世界（地上界，現実の現象界），そして地下に黄泉の国（地下界，死者霊の冥界）という三層構造を持った新たな精神的，思想的世界を持つに至った。

この三層構造を新機軸として，神々が配され秩序付けられた世界観こそが，現代にまで通じる神道の祖型なのである。支配者としての天孫族の奉じる神々が天津神とされ，それ以前の神々は国津神と呼ばれた。両者を併せて天神地祇と言う<sup>28)</sup>。種族論的に言えば縄文人の神々が国津神なのではない。弥生時代以降の朝鮮半島からの渡来人の奉じる神であるが，天皇家を中心とした天孫族の渡来と統治の浸透以前のものが国津神とされたのである。出雲

大社の大国主大神、諏訪大社の建御名方神などがその代表であるが、出雲や諏訪は既にクニを形成していた形跡があり、したがって、天孫族によって大和の国が支配権を全国に拡大するに連れて、神々も秩序付けられていったところに神道が形成されたと言い得るのである。それは、考古学的にも古墳の形体やその分布域の拡大からも照合されるであろう。

神道の象徴である神社の起源は詳らかでないが、日本各地の神社の本社とされるような大社には氏神的要素が強いと言えよう。例えば、奈良の春日大社や茨城の鹿島神宮は藤原氏の氏神であるし、京都の松尾大社や伏見稲荷大社は渡来系の豪族の秦氏の氏神である。しかし、そればかりでなく、前述の出雲大社は特定の氏族と言うよりクニとも言うべき部族共同体の信仰の対象であったろうし、諏訪大社などは諏訪湖に面していて、おそらくは縄文時代以来の神聖なる霊場であったと思われる。

御神体を山や岩などの自然物とする神社もあり<sup>29)</sup>、縄文時代の聖なる場所が引続き神社として祭られているケースも多く存在するのである。しかし、その場合でも、神格は天皇家を中心としたヒエラルキーのうちに秩序付けられているのが一般的である。したがって、その意味で、神社とは、土着的要素も取り込みつつ、天皇家などの天津神系の人々に特徴的に見られるシャーマニズム的要素を、多分に包含して創出された、信仰の対象としての祭祀の場であり、宗教的建造物であると言えるであろう。

## 5. 結び

神道の始まりを何時の時代に求めるべきかは、大いに議論のあるところであるが、本論で縄文時代の世界観から説き起こしたように、現在の日本人の宗教意識としての神道の中には、太古からの記憶が連綿と沈潜し、それと自覚されなくとも潜在的に混在していると言える。しかも、それが明確な宗教と意識されないほど自然に人々の心理の内奥に浸透しているのである。これまで、本論では時系列に沿って、その要素を分析的に考察してきたが、神道の原型は、大和朝廷による国家統一の完成を見たこの時期でほぼ出揃ってい



ると言ってよいと思われる。

この時代以降の神道は、仏教の刺激によって理論化が図られたり、或いは仏教と混合(神仏習合)したり、様々な様相を呈しながら、現在にまで至るのである。

仏教の伝来は、現世の日常の生活意識のみならず、死後の観念に変質を迫るような、日本民族の精神史にとっての一大事件であったと言える。しかし、神仏習合の経緯や仏教伝来以後の神道の変質について論じるのは、ここでのテーマではない。(チベットやモンゴルなどの地域でも、日本と同様に、伝来した仏教と土着のシャーマニズム的信仰の軋轢と混淆とを経験している。)例えば、われわれは山伏の修験道などに両者の典型的な混淆を見出すことができるかもしれない<sup>30)</sup>。或いは、真言密教の中に土着の信仰の混入の痕跡を見出すことができるかもしれない。したがって、同じ宗教者として、日本の僧侶の中にシャーマン的体質と資質とを見出したとしても決して不思議ではないのである。ここでは、神道と仏教が日本民族の精神世界にあって、あざなえる縄の如く、表裏一体の相貌を呈したり、或いは混淆の形態を呈したり、或いは対立の様相を呈しながら、確実に現代にまで生きていることを確認するに留めたい。

「宗教的要求は人心の最深最大なる要求である」<sup>31)</sup>とは哲学者、西田幾多郎の言葉である。明治以後、西洋哲学の影響を受け、近代科学の洗礼を受けた現代日本人も、測り能わざる運命を前に敬虔な宗教的信仰者となる時間を持つことであろう。生と死の循環は生命としての人間の宿命である。そんな生の実存的、根源的な問題に直面した時、われわれは本論で論じたような民族の精神史に刻まれた宗教意識を、改めて見出し自覚するに違いないのである。

## 註

- 1) 産経新聞では、2007年7月2日から2008年9月29日に亘って、「日本人解剖3章ルーツ」と題して特集を組み、多角的に日本人の起源をめぐる研究成果を紹介した。現段階では、この取材の中に最新の研究成果の一部を見ることができる。

- 2) 中国の異民族観には『史記』以来、一貫して華夷を識別する中華思想が見られる。周辺の異民族は南蛮、北狄、東夷、西戎と呼ばれ、中華文明に属さない者と見做された。いわゆる野蛮人と見做されたと言っても過言ではない。
- 3) 2003年に発表された国立歴史民俗博物館の研究グループによる炭素同位対比を使った年代測定法を活用した研究成果により、弥生時代の開始時期を5世紀ほど繰り上げるべきとする説が提出された。しかし、西日本において水稻農耕技術を安定的に受容した段階を考えれば、弥生時代の開始を紀元前5世紀頃とするのが妥当な見解であろうか。
- 4) 埴原和郎編『日本人はどこからきたか』小学館、1984年、参照。
- 5) 松本秀雄『日本人は何処から来たか』日本放送出版協会、NHKブックス、1992年、参照。松本はこの著作の中で結論として、日本人はバイカル湖畔から来たと述べている。私はこの研究の資料的価値は認めるものの、結論の導き方は安直に過ぎると思われる。この研究の指標とするGm遺伝子(免疫グロブリンに関わる遺伝子)の配合の比率が、現代日本人とバイカル湖周辺のプリアートモンゴルとが近似すると了解しておきたい。現代の遺伝子配合の比率と、混血種族の起源の地を特定することとは別であろう。しかし、この地域に北方系モンゴロイドの一つの拡散の中心があったことは事実であろう。
- 6) 埴原和郎責任編集『日本人誕生』集英社、1986年、所収の「日本人の文化のルーツをアジアに求めて」の中で加藤晋平は先史学の立場から、アジアの後期旧石器時代にはバイカル湖文化センターがあり、そこからの文化の流入が縄文文化の基礎となったと述べている。
- 7) 2006年に北海道が実施した「アイヌ生活実態調査」によれば、道内のアイヌの人口を23,782人としている。一方で、実際のアイヌの人口を20万人を超えるると推計する研究者もいる。
- 8) 佐原真・小林達雄『世界史のなかの縄文——対論』新書館、2001年、など参照。
- 9) 山折哲雄『神と仏——日本人の宗教観——』講談社、講談社現代新書、1983年、74頁、参照。
- 10) 上田正昭『婦化人——古代国家の成立をめぐる——』中央公論社、中公新書、1965年、参照。
- 11) 百済の滅亡は660年、高句麗の滅亡は668年である。両国は滅亡後、再三に亘り復興を試みるが不発に終わる。663年の「白村江の戦い」は日本からの百済援軍と唐・新羅連合軍の会戦であり、百済・日本軍の壊滅的敗戦に終わる。その後、日本と統一新羅は決定的に対立関係となる。
- 12) 〈新日本古典文学大系13〉『続日本紀二』、岩波書店、1990年、14頁、参照。靈龜二年の条(716年)に「駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の高麗人千七百九十九人を以て武蔵国に遷し、始めて高麗郡を置く」とある。〈新編日本古典文学全集4〉『日本書紀③』、小学館、1998年、269頁、参照。天智の段、五年(666年)に「百済の男女二千余人を以て、東国に居らしむ。すべて緇素を扱はず癸亥(六六三年)より起めて三歳に至るまで、並びに官食を賜ふ」とあり、高句

麗や百済からの遺民の消息が記されている。

- 13) 高句麗については『旧唐書』高麗伝に「高麗者出扶餘之別種也」。『新唐書』高麗伝に「高麗本夫餘別種也」とある。百済については『魏書』百濟伝の百済王蓋鹵王の上表文に「臣與高句麗源出夫餘」とある。
- 14) ミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade), *Le Chamanisme et les techniques archaïques de l'extase* には仏語版 (1951 年, 1968 年) と英語版 *Shamanism: Archaic Techniques of Ecstasy*, 1964 があり, 両語版を併用した訳出書が, 堀一郎訳『シャーマニズム』冬樹社, 1974 年, である。本論文では, 堀一郎訳『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術 (上) (下)』筑摩書房, ちくま学芸文庫, 2004 年, を用いた。
- 15) シャーマンと精神病理の関係については, 前掲書 (上) 66 頁, 「シャーマニズムと精神病理学」を参照。エリアーデはここで, 癲癇やヒステリーを論じ, シャーマンは一過性の病的症状を示したとしても, 「全快した病人であり, 自ら治癒するに成功した病人である」(70 頁) としている。
- 16) 覃光広等編『中国少数民族の信仰と習俗 (上巻)』第一書房, 1993 年, 2 頁, 満族の頁。王宏剛『満族与薩滿教』中央民族大学出版社, 2002 年, など参照。
- 17) 正式な名称は「『三国志』魏書東夷伝倭人条」である。
- 18) いわゆる『魏志倭人伝』には「卑彌呼事鬼道能惑衆」とある。
- 19) 記紀神話と言うまでもなく, 天皇の勅命により作られた日本最古の歴史書『古事記』と『日本書紀』に見られる神話的世界を言う。両者には多少の相違点も見られるが概略が一致するため, 併せて記紀神話と呼ばれる。その内容の仔細な記述においては, 朝鮮の歴史書『三国史記』や『三国遺事』などと比較しつつ, 或る時は採り或る時は採らないという慎重な態度が必要であろう。
- 20) 高天原神話, 天孫降臨, 神武の東征などの話は神話であるとともに一定の歴史的事実を伝えていることも確かである。高天原からの天孫降臨を天孫族の故地からの渡来と見做せば, その故地を, 高天原についての記述の自然環境などの諸特徴から, 或いは事実としての民族移動の経路から朝鮮北部から中国東北地区 (マンチュウリア) にかけての地域に, 私は想定したのである。
- 21) アマテラス信仰の性格及びその変遷については, 千田稔『伊勢神宮——東アジアのアマテラス——』中央公論社, 中公新書, 2005 年, など参照。
- 22) 大林太良編『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波書店, 岩波文庫, 1994 年, 所収の「日本文化の基礎構造」59 頁, 参照。
- 23) 記紀による描写からも, アマテラスは女性神であると見られ, おそらくは日神に仕え祭祀を司った巫女 (女性シャーマン) の投影であろうと推測される。ちなみに, アマテラスの御祖が伊耶那岐・伊耶那美であり, 『古事記』では, 神世七代に先立つ別天津神を設けている。タカミムスビは別天津神五柱の中の一つである。これら初登の神々のうち, 最も初めの神が「天之御中主神 (アメノミナカヌシノカミ)」であり, われわれは天神思想における天の主宰者なる至高神として, この神を認めることができる。<新編日本古典文学全集 1> 『古事記』, 小学館, 1997 年, 29 頁, 参照。

- 24) 〈新編日本古典文学全集4〉『日本書紀①』, 小学館, 1998年, 319頁。巻第六活目入彦五十狹茅天皇(垂仁天皇)の条, 参照。
- 25) 丹波の籠神社, 皇大神社, 大宇陀の御杖神社, 四社神社, 尾張の中島宮, 現在の酒見神社などである。
- 26) 〈新編日本古典文学全集4〉『日本書紀①』, 小学館, 1998年, 417頁。巻第九氣長足姫尊(神功皇后)の条, 参照。
- 27) 白山連峰を信仰の対象とするもので, 修験道の聖地としても知られる。山頂に白山比咩神社があり, 祭神は白山菊理媛である。この謎とされる神はおそらく女性シャーマンであろう。
- 28) 天津神系の神を天神と言い, 国津神系の神を地祇と言う。また両者を併せて神祇と言う。縄文時代起源と考えられる「ミシャグジ神」は各地において神社の傍に小さく祀られているのが一般的である。
- 29) 例えば, 富士山を信仰の対象とし, 浅間大神を祭ったとされ, 木花佐久夜毘売命を祭神とする浅間神社, 三輪山自体を御神体とする大神神社などをはじめ, 山岳や海を祭る神社は日本各地に枚挙にいとまがない。
- 30) そもそも, 修験道とは経や陀羅尼を唱えながら, 自ら身体と精神の浄化と変質を求めるものである。修行過程の変性意識の中で幻視し合一する対象は, 神仏の習合的靈感であることがしばしばである。
- 31) 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫, 1950年, 213頁。

## 附記

私は2008年9月から2010年7月にかけて中国政府奨学金留学生・高級進修生として, 北京の中央民族大学哲学与宗教学学院で研究する機会を持った。また, 同時期に同大学外国語学院日本語学部の顧問教授として, 卒業論文の指導など教育にも携わった。この小論は, 同大学に日本文化を紹介するという意味を含んで書かれたものである。したがって, 内容は多様な学問領域に関わり, 概略的となっていることは否めない。そもそもの目的が中国人に対して, 日本人の成り立ちや精神文化の一端を知ってもらいたいという意図で執筆されているからである。

例えば, 「自然人類学」「歴史学」「シャーマニズム研究」「神道研究」といった分野にも書き及んでいるが, 私本来の専門分野は「仏教学」なのである。概論というものは, それぞれの分野を長年に亘って専門に研鑽してきた者が書くのが相応しい。しかし, 今回は上のような事情により, 概説的な論文となったのであり, 各分野の専門の研究者から見れば, 多々批判すべき記述があるものと思われる。でき得れば, 忌憚ないご批判を仰ぎたいと思う。

尚, 最後に, 2009年に中国東北地方や内モンゴル自治区を訪ねて, エヴェンキ族やモンゴル族の現地調査を行い, 古代日本と通じる高木信仰やトーテム信仰などを実見したことを記しておく。彼らの中に, 天神思想や英雄崇拜などを実際に確認することができた。この現地調査は, 私の生涯に亘るライフワークとなるであろう。

※この論文は、中国・中央民族大学に「日本人の神灵观念变迁研究——以佛教传入之前的信仰观念为例」と題して提出した中国語論文の日本語訳である。しかし、中国語論文はまだ研究雑誌に発表されていないため、これが初刊である。

(中国・中央民族大学外国語学院日語系特任教授 仏教学・宗教学)

〈キーワード〉 宗教意識, 民族形成史, シャーマニズム